群馬県館林市方言のアクセント（一）

――曖昧アクセントの研究――

篠木れい子

一　はじめに

群馬県が所属する関東地方には、三種類のアクセントが分布している。すなわち、東京式アクセント、埼玉式アクセント[1]、崩壊アクセント[2]がそれである。その分布を大雑把に見ると、崩壊アクセントは栃木県や茨城県に、埼玉式アクセントは埼玉県東北部に、東京式アクセントは千葉県や神奈川県、東京都、東北部を除く埼玉県、千葉県、群馬県のほとんどの地域に、それぞれ分布している。これら三種類のアクセントにちょうど囲まれた格好の地に、群馬県の南東端に位置する館林市と邑楽郡の板倉町や明和村があるのである。

異なった種類のアクセントが接触する地域のアクセントは曖昧化している場合が多いが、館林市方言のアクセントも、その例にもれず曖昧化しており、いわゆる曖昧アクセント[3]（地域によっては崩壊アクセント）が行なわれていると言われている。このことは、金田一春彦氏の「関東地方に於けるアクセントの分布」[4]（昭和十三、四年の調査に基づく）[5]によって明らかにされた。更にまた、中沢政雄氏の「邑楽弁の研究」[6]（昭和二十一年の調査に基づく）によっても明らかにされている。

アクセントの一般的な変化の方向は、明瞭アクセントから曖昧アクセントへ、更に曖昧アクセントから崩壊アクセントへ、と言われており、そのような変化をした地域、あるいはしつつある地域も多数報告されている。[8]しかし、一方には、これとは逆の方向への変化を起こしている地域があることもすでに知られている。[9]

それでは、金田一氏や中沢氏の調査からかなりの年月が経った現在、館林市方言のアクセントはどのような変化をとげているのであろうか。また、どのような変化をしつつあるのであろうか。更にまた、今もなお曖昧アクセントが行なわれているとすれば、その実態はいかなるものなのであろうか。

本稿は、以上の点を明らめるその一段階である。

二　昭和十三、四年当時の館林のアクセント

金田一氏の「関東地方に於けるアクセントの分布」によって、昭和十三、四年当時の館林市のアクセントを概観しておきたい。

現在の館林市及び邑楽郡の中で、氏が調査された地点を抜き出すと、次のようである。[10]

（当時の町村名）	（現在の市町村名）	（当時のアクセント）
小泉町	邑楽郡大泉町	東京式アクセント

永楽町	邑楽郡千代田町	東京式アクセント
佐貫村	邑楽郡明和村	崩壊アクセント
館林町	館林市	曖昧な東京式アクセント
大島村	館林市大字大島	崩壊アクセント
伊奈良村	邑楽郡板倉町	型の区別の不明瞭な埼玉式アクセント

ここで、館林市誕生までの歴史について、簡単にふれておこう。[11]

明治四年、廃藩置県によって館林県が誕生したが、同年十一月には山田郡、新田郡とともに新設された栃木県に編入された。しかし、五年後の明治九年には、再び群馬県に編入されている。その後、明治二十一年の市町村制によって、左記に示す一町七村が生まれ、そして昭和二十九年の四月一日に、これらの町と村が合併して、ここに館林市が誕生となったわけである。

館林町（館林町、谷越村、成島村、当郷村）
郷谷村（当郷村、新当郷村、田谷村、四ッ谷村、館林町）
赤羽村（羽附村、赤生田村）
六郷村（新宿村、松原村、小桑原村、青柳村、近藤村、堀工村）
三野谷村（上三林村、下三林村、野辺村、入ケ谷村、矢島村）
多々良村（成島村、高根村、木戸村、日向村、谷越村）
渡瀬村（下早川田村、上早川田村、傍示塚村、足次村、大新田村、岡野村）
大島村（北大島村）

さて、現在館林市になっている館林町と大島村は、昭和十三、四年当時は、前者には東京式アクセントであるにはあるがかなり曖昧化しているアクセント（館林式アクセント）が、後者には崩壊アクセントが行なわれていたことが知られる。

〃館林式アクセント〃の名を与えられた館林町のアクセントについて、氏の記述から重要と思われる事項を要約して示せば、次のようになろう。[12]

1、言わせる調査では、同じ語に対する発音は一致しなかった。

2、読ませる調査でも、個々の単語のアクセントも、生徒生徒によって必ずしも一致しなかった。[13]

3、東京式アクセントの地域では、同じ語のアクセントが人によって異なる場合があれば、話者同志は変だと気づくが、そのようなことはほとんどなかった。

4、同じ語に対する発音が一致しないのに、例えば「箸」と「橋」の同音異義語がどのように違うかと問うと、東京式アクセントと同じ区別で答えた。

5、ていねいな発音では、どのように発音してよいか迷っている様子であった。[14]

6、○○ダ型と○○ダ型のものは、単独でも割合明らかな区別があるようであった。

次に、二拍名詞の発音の傾向について、少し詳しく見ておきたい。

イ、東京式アクセントで○○ダ型のもの（Ⅳ・Ⅴ類）

単独の場合　○○、○○、○○などいろいろに発音され、どれを基準とも定め難い。

「ダ」を付けた場合　○○ダのようになる傾向が著しい。

ロ、東京式アクセントで○○ダ型のもの（Ⅱ・Ⅲ類）

単独の場合　○○のように発音されるものが多い。○○に発音されることもかなりある。○○には余り発音されない。

「ダ」を付けた場合　ほとんど○○ダのように発音される。

ハ、東京式アクセントで○○ダ型のもの（Ⅰ類）

単独の場合　○○または○○のように発音されることが多い。

「ダ」を付けた場合　○○ダ、○○ダ、○○ダなどに発音され、どれを一般的とも定め難い。

三拍名詞は中高型○○○の傾向が強く、東京式アクセントで○○○、○○○のものはほとんど○○○に、東京式アクセントで○○○のものは○○○または○○○で発音されている。

三拍形容詞についても同じようで、東京式アクセントで○○̄○のものは○○̄○に、東京式アクセントで○○̄○のものは○○̄○や○○̄○や○○○などに発音されている。

三、私が行なった調査について

(一)　調査の対象

館林市方言の現在のアクセントの実態を明らかにするには、年代や地域をきめこまかに調査しなければならないが、まずその第一歩として、館林市の小学校十校（第一小学校から第十小学校）の六年生（昭和四十六年四月一日から昭和四十七年三月三十一日までの間の誕生）四十三名の調査を、昭和五十八年二月から十月にかけて試みた（但し、第一小学校[15]、第七小学校、第九小学校については未調査）。各小学校の校長先生や先生方の協力を得て、被調査者が学区の特定地域に偏らないように、また、父親もしくは母親一方がその土地の生え抜きである児童を選出してもらった。

六年生を調査対象とした理由は、次の通りである。

1、かつて金田一氏が調査された話者と年齢を同じにし、四十五年の時を隔てた二時点を比較するため。

2、すでに述べたように、この地域は三種類のアクセントに囲まれた曖昧アクセント地域であるので、狭い地域でも地域差がある可能性が十分考えられる。小学校は、中学校や高校に比べると学区が狭く、それぞれの地域と密着しているので、館林市方言のアクセントの全体の様子を把握するのに良い。

3、六年生（十一歳から十二歳）の生活空間は狭く、かつ、言語歴が単純で等質と考えられるので、アクセントの動きを考察する場合に、諸条件を少なからず簡単にしてくれるであろう。

館林市にある小学校十校の所在地及び話者名は、次の通りである。

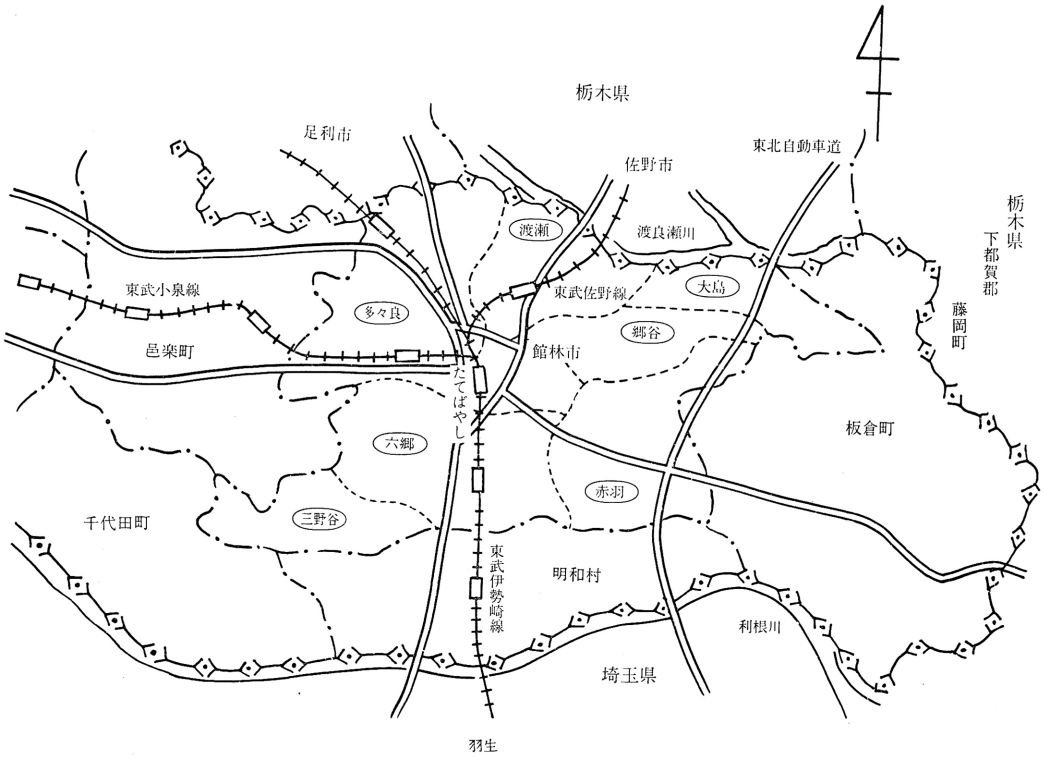
（学校名・所在地）

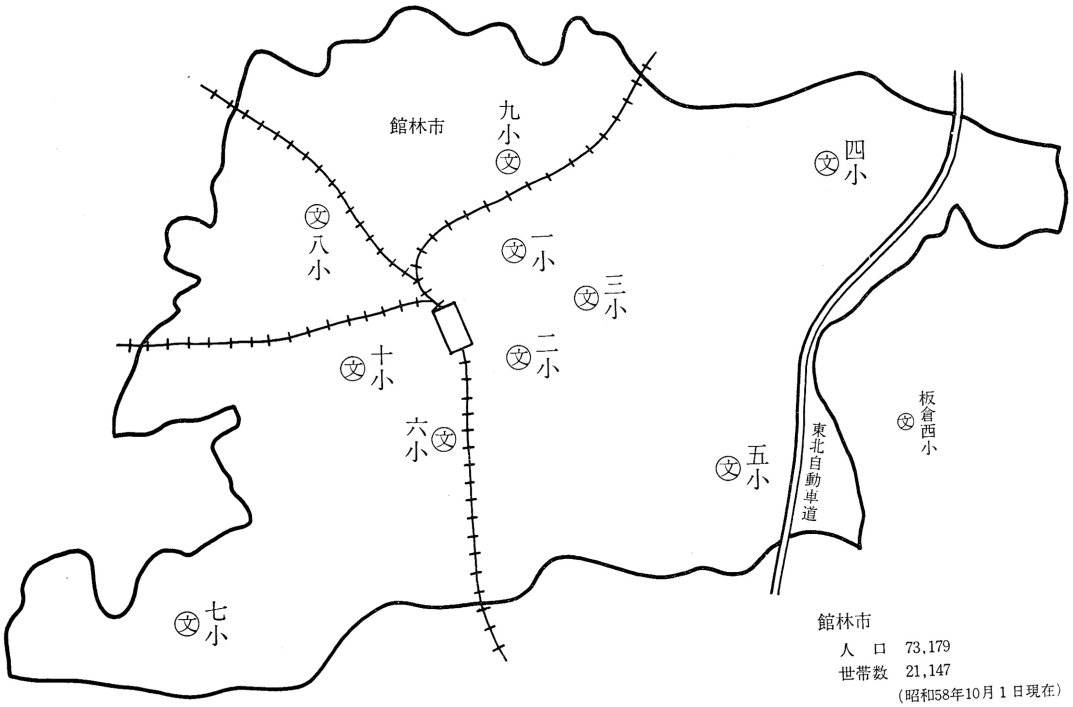
第一小学校　代官町　　第二小学校　本町三丁目
第三小学校　尾曳町　　第四小学校　大字大島
第五小学校　大字羽附　　第六小学校　新宿二丁目
第七小学校　大字上三林　　第八小学校　大字高根
第九小学校　大字足次　　第十小学校　大字近藤

（話者名）　敬称略

第二小学校　ⓐ折田伊美子　ⓑ奥村まゆみ　ⓒ岡村寿恵　ⓓ菊沢正和　ⓔ小暮秀信　ⓕ飯島伸彦
第三小学校　ⓐ寺内泰夫　ⓑ塩田知加　ⓒ渋沢貴之　ⓓ川島由美子
第四小学校　ⓐ吉住洋子　ⓑ黒田博明　ⓒ斉藤未佳　ⓓ笠原千枝子　ⓔ大出みゆき　（ⓒ・ⓓ・ⓔは五年生）
第五小学校　ⓐ増田寿子　ⓑ卯月一郎　ⓒ石川敏也　ⓓ半田いみ子　ⓔ今泉哲也　ⓕ森田真由美　ⓖ根津和之　ⓗ柳田徹
第六小学校　ⓐ須永陽子　ⓑ小河瀬昇　ⓒ瀬下洋子　ⓓ飯島豊　ⓔ滝寿美子　ⓕ松本裕二
第八小学校　ⓐ河本恵美子　ⓑ高橋晃　ⓒ大久保純子　ⓓ加藤紀子　ⓔ葭葉望　ⓕ横川公一　ⓖ大竹清美　ⓗ川田勉　ⓘ御友貴子
第十小学校　ⓐ大津千鶴　ⓑ木村幸子　ⓒ竹森誠幸　ⓓ奥沢真俊　ⓔ稲葉真弓　ⓕ松本哲英

以下、話者については、例えば〝2のⓐ〟（第二小学校のⓐ）のように示す。





館林市
人　口　73,179
世帯数　21,147
（昭和58年10月１日現在）
面　積　60.83km²

(二)　調査の内容

調査は各学校に出かけての面接調査である。その内容は、かつて京阪式アクセントと東京式アクセントの異体系アクセントが接触する高知県幡多郡佐賀町で行なった調査と同じく、次に示す四種類である。[16]

（調査1）

二拍名詞の各類から二拍目の母音の広狭を考慮して選んだ五十語について、単独の場合の発音と付属語（「が」「は」）が付いた場合の発音とを調査した。一枚のカードに二拍名詞一語を書き、類を無視して無差別に並べたものを話者に渡し、まず名詞それだけの発音を、次に助詞「が」あるいは「は」を付けて短文を自由に作ってもらい、その発音を調べた。これは言わせる調査と読ませる調査の中間的なものである。五十語は次の通りである。

鼻・血・梅・酒・飴・顔・水・鳥・首・道（Ⅰ類）
川・歌・胸・雲・音・夏・冬・橋・雪（Ⅱ類）
草・花・山・池・竿・犬・足・栗・月・波（Ⅲ類）
肩・鎌・空・種・糸・臼・息・海・帯・箸（Ⅳ類）
鮒・汗・雨・蔭・声・蜘蛛・猿・鶴・春・秋・鯉（Ⅴ類）

（調査2）

三拍形容詞について、東京式アクセントで○○○型の「赤い・重い」と、○○○型の「白い・高い」の四語の終止形と連体形の発音を調査した。

（調査3）

次に示す同音異義語の六組をカードに書き、比較しながら発音してもらった。

飴・雨　橋・箸　釜・鎌　泡・粟　鼻・花　雲・蜘蛛

（調査4）

Ⅰ類の「鼻」と他の類の「音・山・肩・窓」（二拍目広母音）を、「首」と「冬・犬・松・鶴」（二拍目狭母音）を比較しながら発音してもらった。

以上の四つについて、原則として二回ずつ発音してもらった。一回目と二回目のアクセントが異なった場合には、更にもう一、二度発音してもらったり、調査者が発音して、どちらがより話者の発音に近いか、どちらがその語の意味を表わしていると思うかなどを尋ねて、反省的型を把握すべく努力をした。調査3・調査4の二回目の発音は、一回目と順を逆にして発音してもらった。

四、昭和五十八年現在の館林市方言のアクセント

――小学生の場合――

七校四十三名の児童を調査した結果、学校単位で見ると、大きくは二つのグループに分けることができる。その一方はほとんど東京式アクセントと認定してよいものであり、他方は四十四、五年前の曖昧さとはその実態を多少異にするが、曖昧アクセントと認定してよいものである。前者は館林市の中央部から西部にある小学校であり、後者は館林市の東部にある小学校である。

Aグループ（東京式アクセント）

第二小学校、第六小学校、第八小学校、第十小学校

Bグループ（曖昧アクセント）

第四小学校、第五小学校

もちろん個人単位で見れば、Bグループの児童の中にも、Aグループに入れてもさしつかえない児童も見られる。また、Aグループの中にも同音異義語などの区別があいまいになっている児童も見られるが、以下、二つのグループに分けて、その実態を述べよう。

(一)　Aグループの実態と考察

Aグループの四校はおおよそ同じような様子であったので、この中から、旧館林町にあり館林市の中心に位置する第二小学校と、館林市の西はずれに位置する旧多々良村にある第八小学校の児童十五人について述べる。

Aグループについては、調査1の発音は一回だけですませた。但し、その一回の発音が東京式アクセントと異なる場合には、二度三度発音してもらい、反省的型を求める努力をした。8のⓓについては調査1を欠いた。

以下、調査1から調査4において、東京式アクセントと異なる発音が現われたものについてのみ示せば、次の通りである。

反省的型までもが東京式アクセントと異なるものについては、例えば《○○▽》のように記す。

一回の発音は東京式アクセントとは異なったが、その反省的型は東京式アクセントと同じものについては、例えば〔○○▽〕のように記す。

《　》も〔　〕もない、例えば○○▽は、反省的型を確認しなかったことを示す。

話者の後の（　）中は、その話者の居住地、すなわち成育地を示す。

2のⓐ（松原）栗《○○▽》、鎌《○○▽》、カマの区別無し。
2のⓑ（松原）栗《○○▽》、竿《○○▽》
2のⓒ（富士見町）栗《○○▽》、皿　○○▽
2のⓓ（成島）栗《○○▽》、道〔○○▽〕、皿〔○○▽〕、息〔○○〕、箸〔○○▽〕、鎌《○○》〔○○▽〕　カマの区別無し。調査3は全体的にあいまい。
2のⓔ（大手町）栗《○○▽》、糸〔○○、○○▽〕飴、〔○○▽〕、鎌《○○、○○▽》　カマとアワの区別無し。調査3は全体的にあいまい。
2のⓕ（大手町）栗《○○▽》、竿《○○▽》
8のⓐ（成北）栗《○○▽》、竿《○○▽》
8のⓑ（日向）栗《○○▽》、竿《○○▽》、足〔○○▽〕、月〔○○▽〕、糸〔○○▽〕、鎌〔○○▽〕　アワの区別無し。調査3は全体的にあいまい。
8のⓒ（日向）栗《○○▽》、竿《○○▽》、鎌〔○○▽〕　カマの区別無し。調査3は全体的にあいまい。
8のⓔ（松沼）栗《○○▽》、竿《○○▽》
8のⓕ（高根）道〔○○▽〕、飴〔○○▽〕、雨〔○○〕、鎌　○○、○○▽　調査2・3はあいまい。アメのみかろうじて区別あり。調査4で「山・冬」が〔○○〕
8のⓖ（高根）栗《○○▽》、竿《○○▽》
8のⓗ（木戸）栗《○○▽》、竿《○○▽》、汗〔○○〕、糸〔○○○▽〕、箸〔○○〕　調査2・3は区別はあるがややあいまい。
8のⓘ（木戸）栗《○○▽》、竿《○○▽》

以上の結果から、次のようなことが言えよう。

1、「栗・竿」の二語のアクセントは東京式アクセントでは尾高下型であるが、当方言においては尾高平型であると考えられる。なぜならば、型知覚も明瞭であり、同音異義語の区別や三拍形容詞の二型の対立もはっきりしている2のⓑ、2のⓕ、8のⓐ、8のⓔ、8のⓖ、8のⓘは、この二語だけが東京式アクセントと異なる相を示している。

2、「栗・竿」を除いて見ると、すっかり東京式アクセントになっている児童と、何語かにゆれの見られる児童、同音異義語の区別がやあいまいになっている児童が、それぞれの学校に見られる。また、第八小学校では字ごとに二名ずつの調査を試みたが、特に字による差は認められない。これらのことから、Aグループの中においては、学校差や地域差はないと考えてよいようである。

3、ゆれの見られた語は「道・皿(Ⅰ)、足・月(Ⅲ)、息(Ⅳ)、汗(Ⅴ)」および同音異義語の「雨・飴・橋・箸・鎌」であった。この同音異義語を除けば、その異なり語数はわずかに七語であり、しかも、それらの多くの反省的型は東京式アクセントと同じであると認められた。この七語については、共通の音環境などは見つけられない。

4、ゆれが見られたアクセント節は、単独より付属語が付いたアクセント節に多く、その発音のゆれは○○▽が多かった。これはかつての館林式アクセントの面影を偲ばせるものである。

5、Ⅰ類とⅡ・Ⅲ類の語の単独のアクセントには、対立が認められなかった。

6、三拍形容詞の二型の対立は、全員に認められた。

類		Ⅰ												
	語	皿	梅	酒	顔	水	道	鳥	首	鼻	飴	歌	川
第四小学校	単独の場合 ⓐ	—	—	—	⌒	—	—	—	—	—	—	—	—
	単独の場合 ⓑ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	—	—
	単独の場合 ⓒ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	—	—
	単独の場合 ⓓ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	単独の場合 ⓔ	—	—	—	—	—	—	—	—	+	—	—	—
	付属語が付いた場合 ⓐ	⌒	—	⌒	—	—	—	⌒	⌒	—	⌒	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓑ	⌒	⌒	—	—	—	—	—	—	—	—	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓒ	—	—	—	—	—	⌒	—	—	—	⌒	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓓ	—	⌒	—	—	—	—	—	—	—	—	∧	—
	付属語が付いた場合 ⓔ	—	∧	—	—	—	—	—	—	⌒	—	∧	∧
第五小学校	単独の場合 ⓐ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	—	—
	単独の場合 ⓑ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	単独の場合 ⓒ	—	—	+	+	—	—	—	—	—	—	—	—
	単独の場合 ⓓ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	単独の場合 ⓔ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	単独の場合 ⓗ	—	—	—	—	—	—	+	—	+	—	—	—
	単独の場合 ⓕ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	単独の場合 ⓖ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	付属語が付いた場合 ⓐ	—	⌒	⌒	—	—	⌒	⌒	⌒	⌒	—	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓑ	⌒	—	—	—	—	—	⌒	⌒	⌒	⌒	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓒ	⌒	⌒	—	—	∧	—	⌒	⌒	∧	⌒	∧	⌒
	付属語が付いた場合 ⓓ	⌒	⌒	—	—	∧	⌒	—	—	∧	⌒	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓔ	⌒	⌒	⌒	—	—	—	⌒	—	—	—	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓗ	⌒	—	—	—	—	⌒	⌒	⌒	⌒	—	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓕ	∧	—	∧	—	—	∧	—	—	∧	∧	∧	∧
	付属語が付いた場合 ⓖ	∧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	∧	∧

(二)　Bグループの実態と考察

館林市の住人の間でも、第四小学校、第五小学校のある地域、すなわち大島や赤羽地区のことばは少し違うと言われているが、そのことば通り、小学生においても、Aグループとはその様子を異にしている。もちろん、前にも述べたように、中にはAグループに入れてもさしつかえないような児童もいるが、その数は少ない。

大島は、かつて崩壊アクセントが行なわれていた地域である。大島・赤羽は、いずれも館林市の東端に位置し、大島は栃木県の下都賀郡藤岡町に接し、赤羽は邑楽郡板倉町に接している。

ここに、この二校の調査1の全資料を示し、その実態を見ていきたい。

V							Ⅳ										Ⅲ										Ⅱ						
蔭	汗	鮒	声	鯉	雨	蜘蛛	箸	鎌	帯	海	息	臼	糸	種	空	肩	波	月	足	犬	池	山	草	花	竿	栗	雲	橋	雪	冬	夏	音	胸
1	1	1	1	1	1	1	1	−	1	1	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	1	1	−	1	1	1	1	1	1	+	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	+	−	1	−	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	1	1	1	+	1	1	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	1	1	1	+	1	1	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	+	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	+	−	1	−	−	−	−	−	−
小	1	小	1	1	1	小	∧	∧	∧	∧	小	1	小	+	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	合	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
1	1	1	1	1	1	1	小	1	1	1	1	1	1	1	1	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
1	1	1	1	1	1	1	1	∧	1	1	1	1	1	1	1	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	合
1	1	1	1	1	小	1	1	小	1	1	1	1	1	1	1	1	∧	−	∧	∧	∧	∧	∧	合	−	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
小	小	1	1	1	1	1	1	1	小	1	小	1	小	1	1	小	∧	−	∧	−	∧	∧	∧	∧	+	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	合
+	1	+	1	1	1	−	+	1	+	+	1	1	+	+	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	+	−	−	−	−	−	−
1	−	1	−	1	−	+	+	−	−	+	1	+	+	+	+	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	+	−	−	−	−	−	−
+	+	1	1	1	+	+	−	+	1	+	+	+	+	+	1	1	−	−	−	−	−	−	−	+	−	−	1	−	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	1	1	+	+	+	1	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	+	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	+	1	−	1	1	1	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	+	1	1	+	1	1	1	1	1	+	1	+	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	+	+	−	−	−	−
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	−	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−
−	1	1	1	1	1	1	小	小	小	小	小	1	1	1	小	小	合	合	∧	合	∧	合	∧	−	合	合	1	合	∧	∧	合	小	∧
1	小	1	小	1	小	+	小	+	1	小	小	小	1	1	小	小	∧	∧	∧	合	合	合	∧	合	−	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
合	小	小	1	1	合	小	∧	小	小	小	小	∧	∧	合	小	1	∧	合	∧	∧	∧	合	合	合	−	合	小	∧	合	合	∧	∧	∧
1	1	1	1	1	1	1	∧	1	小	1	1	1	1	1	小	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	合	合	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
1	1	1	1	1	小	1	∧	1	1	1	1	1	1	1	1	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	小	1	1	1	1	1	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	∧	1	1	1	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	∧	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧
1	1	1	1	1	1	1	1	∧	1	1	1	1	1	1	1	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧	合	∧	∧	−	1	∧	∧	∧	∧	∧	∧

	秋	春	鶴	猿
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	⅄	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	＋	＋
＋	＋	＋	－	＋
ー	＋	＋	ー	＋
ー	ー	ー	ー	ー
＋	ー	ー	ー	－
ー	ー	ー	＋	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	⅄	＋	⅄
ー	ー	＋	⅄	⅄
ー	ー	ー	⅄	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー
ー	ー	ー	ー	ー

ー　○○、○○▽　例えば○○にまとめたものの中には、○○や○○、○○、○○、○○などを含んでいる。

ー　○○、○○▽

＼　○○▽

右の三つの記号の組合わせで、二回の発音を表わした。したがって、ー－＼だけで記されているところは、二回の発音が同じであったことになる。

5の(f)と(g)は、一回の発音である。

話者の居住地は次の通りである。

4の(a)（大島正儀内）、4の(b)（大島本郷）、4の(c)（大島岡里）、4の(d)（大島寄居）、4の(e)（田谷）、5の(a)（赤生田）、5の(b)（赤生田）、5の(c)（羽附）、5の(d)（羽附）、5の(e)（羽附、5の(f)（羽附）、5の(g)（羽附）、5の(h)（上赤生田）。

Bグループは、Aグループに比べると、全体的にあいまいである。高低の差も小さく、特に単独のアクセント節の場合にその差はきわめて小さくなる傾向があり、調査をしていても、その聞きとりは難しかった。

二校の実態は、いささか異なっている。特に、Ⅰ類とⅣ・Ⅴ類の語に相異が見出せる。

以下、二拍名詞のアクセントについて見ていこう。

東京式アクセントで○○▽型のⅠ類の語は、同音異義語をもつ「飴・鼻」を除いて見ると、単独の場合、四小は五名ともに東京式アクセントと同じ○○で安定している。それに対して、五小では(c)の「酒・顔」に、(h)の「鳥」に頭高○○の発音が、一回ずつではあるが現われている。わずかに三語に、しかも二名にではあるが、Ⅰ類の語に頭高の発音が現われたということは注目しなければならない。[17]

付属語が付いた場合は、二校ともに○○▽が現われているが、その現われる頻度は五小の方が大きい。この動きはAグループの8の(f)にも見られたが、その数は少なく、わずかに二語にであった。いかに五小において、Ⅰ類の付属語が付いたアクセント節に○○▽が多く現われているかを、二つの割合で見てみると、次のようになる。

全発音数の中で○○▽が現われた割合

第五小学校　30％　第四小学校　14％

Ⅰ類十語の中で○○▽が現われた語の割合

第五小学校　約49％　第四小学校　24％

次に、東京式アクセントで○○▽型となるⅡ・Ⅲ類の語についてみてみよう。

まず、Aグループで、東京式アクセントとは異なってはいるが、ほとんど全員が○○▽の発音をしていた「栗」について見ると、四小ではAと同じく、全員が○○▽に発音した。五小では半数の四名だけが○○▽で、残りの半数は東京式アクセントと同じ○○▽であった。これは、後者の四名が東京式アクセント化していると言うよりは、むしろ、本来○○▽であったものが、○○▽化していると考えた方がよいように思われる。「竿」については○○▽も現われるが、○○▽の方が多かった。この「竿」は、4の(b)と(e)の単独の場合に頭高の発音が見られた。これは、二拍目が母音だけの不安定な拍であることが影響しているのであろうか。

東京式アクセントで頭高型の「雲」は、四小ではAと同じく全員頭高であったが、五小では、単独の場合三名に○○が、付属語が付いた場合一名に○○▽が現われている。

以上述べた「栗・雲」の二語を除いて見ると、Ⅱ・Ⅲ類の語は、四小、五小ともに同じ傾向を示している。すなわち、付属語が付いたアクセント節は○○▽が主流であるが、この他に○○▽も現われている。この○

○▽が現われる傾向は、四小より五小の方がやや強いようである。

五小においては、Ⅰ類に○○▽が多く現われ、一方、Ⅱ・Ⅲ類には○○▽が現われ、その結果、Ⅰ類／Ⅱ・Ⅲ類の対立が弱まっている感がある。

単独の場合のアクセントは二校ともにほとんど○○で、わずかに四小では「橋・竿」に、五小では「雪・橋・花」に○○が現われただけである。

次に、東京式アクセントで○○▽型に発音されるⅣ・Ⅴ類の語について見てみると、単独のアクセント節において、四小と五小の間に相異が見られる。すなわち、四小においては同音異義語をもつ「箸・鎌」と「種」には○○が現われているが、それ以外の語は東京式アクセントと同じであったのに対して、五小ではかなりの語に○○が現われている。ちなみに、Ⅳ・Ⅴ類の二十一語中、○○が現われている語数を見ると次のようである。

5のⓐ　8語　　5のⓑ　17語　　5のⓒ　13語
5のⓓ　3語　　5のⓔ　4語　　5のⓗ　5語
5のⓕとⓖ　1語
4のⓐとⓒとⓓ　1語　　4のⓑ　2語　　4のⓔ　0語

5のⓑ及びⓒの数は注目すべきものである。また、二校それぞれ全体で○○が現われる異なり語数は、四小が3語に対して、五小は「鯉」を除く20語で、「鯉」以外の語は、誰かしら○○の発音をしていることになっている。

しかし、付属語が付いた場合は、四小・五小とも同じ様子で、○○▽や○○▽の発音も見られるが、○○▽が主である。○○▽や○○▽が全発音数の中で占める割合は、次のようである。

	第四小学校	第五小学校
○○▽	約14％	約16％
○○▽	約1％	約3％

三拍形容詞のアクセント（調査2）も、Aに比べると全体的にかなりあいまいになっているが、反省的型はほとんどの児童に○○○と○○○の対立が認められた。中でも、4のⓒ・ⓓ、5のⓐ・ⓔ・ⓕ・ⓖは二型の対立が明瞭であった。しかし、5のⓐなどは、終止形の発音は、二回ともすべて○○○で、区別がないようであった。かろうじて、連体形の場合に二つの対立が認められた。5のⓒ、4のⓔもかなりあいまいであった。特に5のⓒはあいまいで、「白い」に○○○の発音も見られた。

同音異義語の区別（調査3）も、全体的に非常にあいまいである。あいまいながらも「飴・雨」、「橋・箸」、「釜・鎌」、「粟・泡」の区別が全部できたのは半数に足らなかった。四つの対の中では、小学生の生活とは余り縁のない鎌や粟の入った対の区別がないものが多かった。4のⓒ・ⓓや5のⓐ・ⓒなどは、何度発音してもらっても、最後まではっきりしなかった。しかし、不思議なことに、4のⓒやⓓにきき取りの調査をしてみると、金田一氏の報告の中にもあったように、しばらく考えた後に、アメは「雨」にアメは「飴」に聞こえるという、東京式アクセントと同じ答えが出たのであった。

調査4では、4のⓒの「音」と5のⓒの「音・窓・犬」に東京式アクセントと異なる発音が見られた。

以上、第四小学校、第五小学校について見てきたが、いずれもAグループに比べてあいまいで、ゆれの見られる語が多かった。特に五小がそうであった。二校を比較すると、四小はより東京式アクセントに近く、五小はより四十五年前の館林のアクセントに近い様子であった。

四小は、かつて崩壊アクセント地域であったにもかかわらず、しかも東に広域の崩壊アクセント地域がひかえているにもかかわらず、あいまいながらもかなり東京式アクセントに近い相を示していたことは驚きであった。

それでは、館林市の多くの小学生が東京式アクセント化している中で、五小がこのような相を示しているのは、どうしてであろうか。一つ見逃がしてはならないと思うことに、小学校と中学校の学区の関係がある。五小の児童はそっくりそのまま赤羽中学校に入学するのであるが、他の

中学校が複数の小学校からの子供が入学してくるのに対して、赤羽中学校は五小の子供だけで構成されているのである。この地域の中学生については未調査であるが、おそらく中学生のアクセントも、他の中学生と異なった様子を呈しているのではないかと考えられる。

四小は第二中学校の学区に入り、この第二中学校には二小の一部と三小の全員も入学してくる。しかも、四小の児童数は、他の小学校に比べてきわめて少ない。参考までに、各小学校の六年生の児童数を示すと次のようである。

一小　二一五　二小　一四一　三小　一三三
四小　二五　五小　一〇〇　六小　二三一
七小　五一　八小　一五六　九小　五七
十小　一八七
（昭和五十八年十月現在）

中学生時代もまだ言語形成期であるので、この四小の子供たちが中学校の三年間の生活で、どのようにアクセントが変化していくのであろうか。中学生の調査と、調査を行なった小学生の追跡調査を是非行ないたいと思っている。

五　まとめ――今後の課題――

小学生の調査の他に、中学生、高校生、また二十代、四十代、五十代の調査も二、三人ずつ試みたが、いずれも人数的にも地域的にも不十分なので、それらについては、不足を補った上であらためて論じたい。

ここでは、その不十分なる資料をも念頭に置いた上で、今後の研究に残したいくつかの問題点を述べ、まとめとしたい。

今回、館林市内の小学生に限定して述べたが、隣接する地域の実態をきめこまかに把握する必要がある。特に、館林市の小学校の中で最もあいまいであった五小（赤羽地区）に接する邑楽郡板倉町のアクセントは詳しく見ていかなければならない。[18]

実は、五小に最も近い板倉西小学校の六年生三名（荻野光則君、荻野貴子さん、根岸美和さん）の調査資料がある。調査を行なう前は、次のような予想をしていた。この小学校の児童は五小ときわめて似た相か、あるいは更にあいまいな相をしているのではなかろうか。具体的には、Ⅰ類やⅡ・Ⅲ類の語の単独のアクセント節に、かなり多く◯|◯が現われるのではなかろうか。同音異義語の区別は全くないであろう。

しかし、これらの予想はあたらなかった。全体的に見れば、五小の相と似てはいるが、五小よりは東京式アクセントに近く、しかもこの三名の中の一名は、同音異義語や、例の「栗・竿」の語を除くと、すっかり東京式アクセントであったのである。

かつて、崩壊アクセントが行なわれていたとの報告がある邑楽郡明和村の明和西小学校六年生一名（篠木美奈子さん）の調査資料もある。こちらは、やはりかつて崩壊アクセントが行なわれていた大島の児童ときわめて相似た相を示していた。ちなみに、この児童の祖母にあたる七十歳の人（篠木登美氏）の発音は、崩壊アクセントと認められるものであった。二拍名詞の単独のアクセント節には◯|◯と◯|◯が入り混り、どちらに発音しようと一向にさしつかえない様子であったし、付属語が付いたアクセント節はほとんど◯|◯▽で発音された。もちろん形容詞の対立も、同音異義語の区別も全く無かった。

今後、板倉町や明和村にとどまらず、更に利根川を越えた埼玉県の北東部や栃木県にまで、調査の手を広げなければならない。

また同時に、各年代の調査も必要なことは言うまでもない。

館林市方言に於て、東京式アクセント化の動きは四十歳代あたりから見られるように思うが、やはり個人差が大きいようである。小学生の場合にも個人差が見られたが、何故このような個人差が現われるのであろうか。彼らをとりまく言語生活の環境、あるいは言語外の諸環境をもっと詳しく見ていく必要があろう。今回の調査では両親や兄弟のアクセントの影響はほとんどないのではないかと思われる場合が多かったが、[19]しかし、その影響もあるのではないかと思われた場合もあった。例えば、

Aグループの中でもとりわけ明瞭な東京式アクセントであった児童の母親の言語形成地を見ると、高崎市や東京都であった。また逆に、Aグループの中にあっては、ゆれのみられる語が多い児童の生活環境を尋ねると、〝おばあちゃんに育てられた〟ということであった。

ところで、館林市本町で生まれ育った二十四歳の女性（篠木百合子氏）を調査した際に、その話者が自分自身の発音と意識について内省し、それを語ってくれた中に、大変興味のある重要な発言があった。それは「まずカードに書いてある語を見て、さあ発音しようと思うのだが、それにもかかわらず一瞬の沈黙が流れるのは、どう発音してよいかとっさにわからないからである。しかし、例えば「肩」について、調査者がカタ、カタ、カタなどいろいろの発音を呈示すると、カタの発音が一番良いと思うし、「肩」はカタだなと思うのだが、いざ口に出して言ってみるとカタとなってしまって、なかなかカタという発音が出てこないのだ。」という趣旨のものであった。

また、大島の四十五歳の女性（吉住元子氏）も、これと同じような発言をしている。「あらためて問われてみると「肩」はカタであると思うが、日常の生活では〝カタ、カタがイタイ〟のように言っていることが多いように思う。」

これらの発言が語るように、曖昧アクセントといわれている地域では、話者の意識と具体的な発音との間に隔りが見られる場合がきわめて多いのであるが、これらをどのように理解すればよいのであろうか。もちろん、この隔りはこの地域のアクセントが変化の過渡期にあることをもの語っているのであるが。

これらの発言は、調査の方法・内容の検討にまで問題を投じているのである。

私のゼミの学生に崩壊アクセント地域の出身の学生がいるが、彼女たちのなにげない会話を聞いていると、この学生は本当に崩壊アクセント地域で育ったのであろうかと思わせる程に、東京式アクセントの香りを漂わせた会話をする学生と、耳にするからに崩壊アクセント地域の出身だなと思わせる学生がいる。しかし、一見東京的に感じられる学生の方が、自分自身の発音を内省するとはっきりしないのである。

こういった状態に接するとなおさら、曖昧アクセントや崩壊アクセント地域では、日常の会話の実態、読ませた場合、言わせた場合、きかせた場合、内省した場合の実態などなど、それらがどのような傾向を示し、どのように関連しあっているのか、という点についても追求していかなければならないと思う。[20]

この三十余年の間に、日本の社会は、そして私たちの生活は驚くほどに変化をし発展を遂げた。特にマスメディアの発達は著しい。このような社会の激変にともなって、アクセントの変化にも、戦前には見られなかった動きが現われてきた今日、あらゆる視点からの調査、考察が要求されているように思う。今後に課せられた問題は大きく、かつ複雑ではあるが、一つ一つ丹念に調査研究を積み重ね、館林市方言のアクセントの全貌を、また、曖昧アクセントや崩壊アクセントの全貌を明らめていきたい。

六　おわりに

調査に出かけるたびに、それぞれの地域で、労をいとわず、温かく調査に協力して下さる方々にめぐり会い、励まされる。

今回も多勢の方々にご協力いただいた。ここにそのお名前を記し、心より感謝申し上げます。

（順不同）

川島栄一先生、関野寛治先生、松沢清先生、森田由雄先生、田島弘先生、高瀬利一先生、藤倉国雄先生、飯塚英夫先生、大隅稔也先生、阿部政吉氏、田部井真一氏、田部井明紀氏、館林市教育委員会、館林市役所学校教育課・行政課

註

(1) 金田一春彦氏の説明をそのまま拝借すれば、「明瞭な型の区別をもつが、その区別の方法は標準語と逆になっている」アクセントをいう。

(2) 平板一型アクセント、一型アクセントあるいは無型アクセント、無アクセントとも言われている。いずれにしても、型の区別がないアクセント、拍相互の間の相対的な高低の配置のきまりをもたないアクセントをいう。

(3) 平山輝男先生は次のように説明なさっている。「アクセントの型の高低の差が少なくて、型の区別の微妙なものです。話者が静かに落ちついて、もっとも自然な状態でする発話のなかでは、体系的なアクセントの型がありますが、話者が緊張したり、不自然な環境におかれたりすると、アクセントが動揺することがあります。したがって、この種の方言の話者は、たとえば京都方言や東京方言などの話者よりはアクセントの型知覚が鈍いのです。」(『日本の方言』一九六八年、講談社)

(4) 『日本語のアクセント』一九四二年、中央公論社。

(5) 季刊『国語』一九四八年、群馬国語文化研究所。

(6) 他に、館林市方言のアクセントについて論じたものに、飯塚英夫「館林のアクセント――2音節名詞について」(『方言研究第2号』一九七〇年、国学院大学栃木高等学校方言研究会)がある。

(7) 平山輝男『日本の方言』(前掲註3参照)

(8) 大橋勝男「いわゆる多型アクセントいわゆる(崩壊)一型アクセントとの間」(一九八二年、第五回一型アクセント研究会発表資料)参照。曖昧アクセントから崩壊アクセントへの変化例として、新潟県佐渡郡相川町関方言、山形県北東部四地域が上げられている。

つい先日、二型アクセントで有名な鹿児島市出身の学生霜出美佐子さん(十九歳)のアクセントを調べたところ、二拍のアクセント節があいまい化していた。特に二拍名詞で○̄○になる語が○○̄に発音される傾向が著しかった。複数の人を調査し確認を急ぎたいが、この動きが彼女個人ではなく、鹿児島市の青年層全体に見られるとすれば、二型から尾高一型への変化が起りつつあることであり、これも一般的なアクセント変化の例となろう。

(9) 木野田れい子「埼玉県南崎玉郡久喜町のアクセント――曖昧アクセントから東京式アクセントへ――」(『都大論究』第10号、一九七二年、東京都立大学国語国文学会)参照。

中条修「無アクセント地域における青年層のアクセントの動向――静岡市井川方言の場合――」(『静岡大学教育学部研究報告』第33号、一九八二年)参照。

前掲註8の資料参照。

(10) 金田一春彦『埼玉県下に分布する特殊アクセントの考察』(一九四八年)の付図〝埼玉アクセント分布図〟より抜き出した。

(11) 館林市誌編集委員会編『館林市誌　歴史篇』(一九六九年、館林市役所)参照。

(12) いわゆるなぞなぞ式の調査。

(13) 書かれた調査語を読んでもらう調査。

(14) 金田一氏は一音節ずつ切ってゆっくり発音してもらう〝ていねいな発音〟は、普通その音の発音意図を正しく実現すると考え、その有効性を説いておられる。金田一春彦『日本語音韻の研究』(一九六七年、東京堂出版)参照。

(15) 第一小学校へも調査の依頼に行き、校長先生より快い協力のお返事をいただいたが、こちらの都合で今回調査はできなかった。ここに失礼をお詫びしたい。

(16) 篠木れい子「異体系アクセント接触地域のアクセントの研究――高知県幡多郡佐賀町の場合――」(平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題』明治書院、一九八四年)参照。

(17) 崩壊アクセントと認定される邑楽郡板倉町下五箇の岡田豊吉氏(六十七歳)の二拍名詞の発音の実態は、次のようであった。すなわち、単独のアクセント節においては、○○でも○○̄でもさしつかえないが、ほとんど○○̄の発音が現われた。付属語が付いた場合には、ほとんど○○̄▽で発音された。このような事実と、小学生の全体の資料から、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の単独のアクセント節に○○̄が現われるその頻度は、崩壊アクセントとの距離を暗示しているように思われてならない。

(18) 板倉町史編さん委員会『利根川中流域板倉町周辺の言語(方言)』(町史別巻2、一九七九年)の「第3章、音韻・アクセント」(飯塚英夫担当)参照。

(19) 一家族の中に、いろいろな程度の曖昧アクセントや東京式アクセントのもち主が同居している例は多く見られる。

例えば、館林市大手町に住む粕川一家や飯島一家などはその良い例で、一つ屋根の下に、いろいろなアクセントの相が存在しているのである。

(20) 篠木ゼミの参加者の中で、このような観点からアクセントの研究をしている学生がいる。四年生の三ッ木美佐枝は、館林市のアクセントについていろいろなアクセント節を準備し、読ませる調査における動きを考察している。三年生の今泉郁代と広川正子は、広川が館林市出身であることを活かし、自然談話の実態と読ませる調査との比較を行なっている。同じく三年生の見目雪江は栃木県日光市の青年層のアクセントについて、高校卒業後の居住地に注目しながら、その実態を追っている。これらは『篠木ゼミレポート　2』(一九八四年三月発行予定)で報告することになっているが、その成果が期待される。

追記

群馬県立女子大学国文学科(青木紀元、有川美亀男、水沢利忠、平林文雄、小内一明、和田義昭、岡本隆男、渡辺正彦、佐藤囿久、篠木れい子)は、昭和五十六年度から五十八年度までの三ケ年にわたり、群馬県より特別研究費をいただき、群馬県下の国語国文学資料の発掘及び方言研究を行なった。本稿はその成果の一部である。

(昭和五十八年十月三十日脱稿)